

—研究報告—

高齢者看護学実習におけるライフインタビューと高齢者理解との関連 ～高齢者イメージとエイジズムの変化の分析～

畑野相子¹, 簗原文子¹

¹滋賀医科大学医学部看護学科 臨床看護学講座, 高齢者看護学

要旨

高齢者の尊厳を踏まえた看護を展開することが重要である。しかし、高齢者との交流が少ない環境に育った学生は、高齢者を理解するのが難しい。現時点だけをとらえるのではなく、長い人生を歩んできた人として高齢者を理解することが重要と考え、実習にライフインタビューを取り入れた。この実習を、高齢者イメージとエイジズム変化をアウトカムとして評価した。その結果、実習前後でエイジズムは有意に低下した。高齢者イメージは、15項目中10項目が肯定的から肯定的に有意に変化した。エイジズム低下に関連する要因として、インタビューしてきた内容との関連が示唆された。実習にライフインタビューを用いることは、高齢者イメージとエイジズム変化に有効であることが示唆された。

キーワード: ライフインタビュー、高齢者看護学実習、エイジズム、高齢者イメージ

はじめに

高齢化に伴い、高齢者看護の担い手として看護学生への期待が高まっている。高齢者看護では、親しみと尊厳の気持ちを持って援助することが望まれる。高齢者看護の質は、看護者が持つ高齢者イメージの影響をうける^{1~2)}。従って、尊厳を踏まえた看護を思考するには、肯定的イメージを持つことが望ましい。

しかし、少子化や核家族化の進行に伴い、高齢者との交流がしにくい環境で育った学生は、年代のかけ離れた高齢者をイメージしにくく、エイジズム(高齢者差別意識)を有しやすいと考えられる。

そこで、現時点をだけをとらえるのではなく、長い人生を歩んできた人として高齢者を理解することが重要と考え、2012年度から高齢者看護学実習Iにライフインタビューを取り入れた。本研究では、高齢者イメージおよびエイジズムの変化を分析し、ライフインタビューの効果を検討することを目的とした。

ライフインタビューを用いた実習

高齢者理解を目的に、病院の外来と介護保険関連施設で展開している実習に、ライフインタビューを位置づけた。インタビュー内容は学生が計画した。

研究方法

1. 調査対象者: 本学医学部看護学科の3年生59人
2. 研究方法: 質問紙による調査研究
3. 調査期間: 2012年9月~10月
4. 調査内容
 - (1) 基本属性
祖父母との同居経験 会話頻度 両親と祖父母

との交流 祖父母以外の高齢者との交流 高齢者看護学に対する関心

(2) 高齢者に対するエイジズム

原田ら³⁾の「日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版」14項目(以下FSAとする)を用いた。各項目について、「そう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の選択肢に4~0点、反転項目は0~4点を配点した。

(3) 高齢者イメージ

保坂ら⁴⁾の15項目を用いVisual Analog Scale法(以下VASとする)で調査した。

(4) 実習において学生が聞き取りした内容

5. データの収集と分析方法

- (1) 実習開始前と終了後に、質問紙調査をした。
- (2) 実習の前後の結果を対応させるため、個人が識別できるように学生が独自に作成した記号を用いた。
- (3) 実習前後のFSAの変化と関連要因を分析した。属性とイメージ、FSAの関連にはt検定を行い、学習前後のイメージとFSA変化の検定には、Wilcoxonの符号付き順位和検定を行い、高齢者イメージとFSAの関連は、Pearson検定を行った。解析にはspss20.0j for windowsを用い、有意水準は5%とした。

6. 倫理的配慮

研究対象者には、研究への自由意思による参加、不参加による不利益からの保護、成績とは一切関係がないこと、プライバシー保護厳守について保証した。なお、研究者所属機関の倫理委員会にて承認を得た(承認番号 24-101)。

結果

1. 回収率

配布数 59 人、回収数 56 人 (回収率 95.0%) で、前後の突合できなかつた 3 人を除いた 53 人を分析対象者とした (有効回答率 94.6%)。

2. 対象者の概要

- (1) 同居しているのは 8 人 (15.1%)、かつてしていた 18 人 (34.0%)、経験なし 26 人 (49.1%) であった。同居している人は、ほぼ毎日祖父母と会話していると回答した。
- (2) 祖父母以外の高齢者との交流は、ほぼ毎日 1 人、週に 1~2 回は 4 人、月に 1~2 回は 3 人、あまりないは 42 人 (82.4%) だった。
- (3) 祖父母以外の高齢者との会話は、ほぼ毎日 2 人、週に 1~2 回は 4 人、月に 1~2 回は 8 人、あまりないは 37 人 (71.2%) だった。
- (4) 両親と祖父母の交流は、ほぼ毎日 18 人 (34.6%)、週に 1~2 回は 12 人 (23.1%)、月に 1~2 回は 16 人 (30.8%)、あまりないは 2 人だった。
- (5) 高齢者看護学への関心は 全くない・少しあるが 34 人 (64.2%)、かなりある・大いにあるが 11 人 (20.7%) だった。

3. 聞き取った内容

聞き取った内容を表 1、表 2 に示した。外来では、病気のこと、日々の楽しみ、家族に関することが上位を占め、施設では、日常生活、日々の楽しみ、生きる上で大事にしていることが上位を占めた。聞き取り項目数は、外来では 9.8 ± 2.7 (平均 ± SD)、施設では 7.3 ± 3.3 であった。

表1 外来における実習での聞き取り内容 (単位:人)

内 容	聞いた群		聞かなかった群	
	実数	%	実数	%
① 病気のこと	51	96.2	2	3.8
② 通院方法	52	96.2	1	1.8
③ 服薬管理のこと	37	69.8	16	30.2
④ 病気が日常生活に及ぼす影響	49	92.5	4	7.5
⑤ 日常生活の工夫	34	64.2	19	35.8
⑥ 日々の楽しみ、趣味	51	96.2	2	3.8
⑦ 人生の中で嬉しかったこと	20	37.7	33	62.3
⑧ 人生の中で苦しかったこと	18	34.0	35	66.0
⑨ 生きる上で大事にしていること	23	43.4	30	56.6
⑩ 家族のこと	52	98.1	1	1.9
⑪ 地域のこと	28	52.8	25	47.2
⑫ 子ども時代のこと	35	66.0	18	34.0
⑬ 仕事のこと	46	86.8	7	13.2
⑭ 今後の目標	14	26.4	39	73.6

表2 施設における実習での聞き取り内容 (単位:人)

内 容	聞いた群		聞かなかった群	
	実数	%	実数	%
① 病気のこと	29	45.3	24	54.7
② 日常生活のこと	47	88.7	6	11.3
③ 日々の楽しみ、趣味	47	88.7	6	11.3
④ 病気が日常生活に及ぼす影響	25	47.2	28	52.8
⑤ 人生の中で嬉しかったこと	23	43.4	30	56.6
⑥ 人生の中で苦しかったこと	15	28.3	38	71.7
⑦ 生きる上で大事にしていること	47	88.7	6	11.3
⑧ 家族のこと	36	67.9	17	32.1
⑨ 生まれ故郷のこと	39	73.6	14	26.4
⑩ 子ども時代のこと	33	62.3	20	37.7
⑪ 今後の目標	9	17.0	44	83.0
⑫ 仕事のこと	31	58.5	22	41.5
⑬ 戦争のこと	3	5.7	50	94.3

4. 学生の背景と FSA、高齢者イメージとの関連

- (1) 同居経験、両親の祖父母との交流と FSA、高齢者イメージとの関連はみられなかった。
- (2) 高齢者看護学に関心があると回答した学生の FSA は、ないと回答した学生の FSA より有意に低値だった (p < 0.01)。

5. 実習前後の変化

- (1) FSA の変化を表 3 に示した。総得点が有意に低値を示した。下位項目では、5 項目が有意に低値を示した。そのうち 4 項目が第 2 因子 (回避) の項目だった。

表3 エイジズム (FSA) の変化

項 目	実習前		実習後		有意差
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
4	1.64	0.76	1.79	0.66	
5	1.51	0.72	1.51	0.61	
6	1.68	0.83	1.91	0.88	
9	1.36	0.56	1.43	0.54	
10	1.98	0.91	1.89	0.87	***
11	1.40	0.53	1.38	0.49	
7	2.25	1.07	1.96	0.96	*
8	2.13	0.88	2.04	0.98	
12	2.17	0.85	1.83	0.91	*
13	2.32	0.96	2.08	0.94	*
14	2.40	0.84	1.94	0.72	***
1	2.28	0.95	2.11	0.89	
2	2.26	0.86	2.02	0.84	
3	2.49	0.95	2.43	0.95	
総得点	27.87	6.54	26.30	6.77	**

*p < 0.05 **p < 0.005 ***p < 0.001

第1因子 (嫌悪・差別)

- 4. 高齢者に会うと、時々目を合わせないようにしている
- 5. 高齢者が私に話しかけても、私は話したくない
- 6. 高齢者は、若い人の集まりに呼ばれた時は感激すべきだ
- 9. 高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない
- 10. ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない
- 11. 高齢者は誰にも面倒を掛けない場所に住むのが一番だ

第2因子 (回避)

- 7. もし招待されても、自分は老人クラブの行事に行きたくない
- 8. 個人的には、高齢者と長い時間を過ごしたくない
- 12. 高齢者との付き合いは結構楽しい
- 13. できれば高齢者と一緒に住みたくない
- 14. ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる

第3因子 (誹謗)

- 1. 多くの高齢者は、けちでお金や物を貯めている
- 2. 多くの高齢者は、古くから友人とたかまって、新しい友人を作ることに興味がない
- 3. 多くの高齢者は、過去に生きている

- (2) 高齢者イメージ変化を表 4 に示した。15 項目中 10 項目が、肯定的イメージに有意に変化した。

表4 高齢者イメージの変化

	実習前		実習後		有意差
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
① 尊敬の念	78.87	15.74	82.89	18.85	
② 役に立つ	68.81	17.77	75.91	18.55	**
③ 好き	71.08	18.28	76.53	17.63	
④ 明るさ	64.47	17.93	74.57	16.10	***
⑤ 積極性	58.31	19.12	67.57	20.99	**
⑥ さっそう	45.01	20.12	51.28	21.37	**
⑦ 強さ	61.77	21.61	68.55	21.78	**
⑧ あたたかさ	75.94	17.95	82.25	14.28	**
⑨ 優しさ	75.06	18.57	80.54	18.12	
⑩ 上品さ	61.92	18.48	65.64	21.15	
⑪ 思いやり	69.51	18.09	76.49	18.11	**
⑫ プライド	70.71	18.11	72.02	20.35	
⑬ きれいな	53.64	16.07	61.49	17.82	**
⑭ 素直さ	52.57	23.12	62.02	22.26	**
⑮ 考えの新鮮さ	37.55	18.85	48.34	21.10	***

*p < 0.05 **p < 0.005 ***p < 0.001

- (3) 高齢者看護学への関心に変化はなかった。

表5 聞き取り内容とイメージ変化の関連

聞き取り内容	人数	上品さ			素直さ			思いやり			強さ			考えの新鮮さ			プライド			役に立つ			積極性			好き			きれいさ		
		平均	標準偏差	有意差	平均	標準偏差	有意差	平均	標準偏差	有意差	平均	標準偏差	有意差	平均	標準偏差	有意差	平均	標準偏差	有意差	平均	標準偏差	有意差	平均	標準偏差	有意差	平均	標準偏差	有意差			
生活の工夫	あり なし	34 19	-9.00 5.57	25.48 21.83																											
嬉しかったこと	あり なし	20 33	-13.60 3.83	26.21 21.65			-13.60 -1.77	22.30 19.20																							
大事にしていること	あり なし	23 30	-14.20 4.33	21.99 24.58																											
地域のこと	あり なし	28 25	-11.20 4.64	22.07 25.97																											
今後の目標	あり なし	14 39	-19.10 1.82	25.77 22.65																											
病気のこと	あり なし	29 24																													
日常生活	あり なし	47 6																													
楽しみ	あり なし	47 6	-6.45 17.67	24.32 21.69																											
家族のこと	あり なし	36 17																													
故郷のこと	あり なし	39 14																													
子ども時代の話	あり なし	33 20																													
仕事のこと	あり なし	31 22																													
戦争のこと	あり なし	3 50																													

*p<0.05 **p<0.005 ***p<0.001

表6 聞き取り内容とFSA変化の関連

聞き取り内容	人数	第1因子(嫌悪・差別)						第2因子(回避)						第3因子(誹謗)																
		5	10	11	8	12	13	14	1	3																				
病気のこと	あり なし	29 24	0.17 -0.20	0.71 0.51																										
嬉しかったこと	あり なし	20 33																												
苦しかったこと	あり なし	15 38																												
故郷のこと	あり なし	39 14																												
子ども時代の話	あり なし	33 20																												
仕事のこと	あり なし	31 22																												
戦争	あり なし	3 50																												
生活の工夫	あり なし	34 19																												
大事にしていること	あり なし	23 30																												

*p<0.05 **p<0.005 ***p<0.001

6. 面接内容とイメージの関連

13項目がイメージの変化と関連していた。話を聞くことによって、否定的イメージに変化する傾向が見られた(表5)。

7. 面接内容とFSAの関連

9項目がFSAの変化と関連していた。人生の中で苦しかったこと、仕事、故郷に関する内容、生きていくうえで大事にしていることを聞いた学生のFSAが有意に低下していた(表6)。

考察

1. 学生の背景

同居経験がある学生は約半数を占め、国民生活基礎調査の結果と比較すると高値を示している。しかし、他の高齢者との交流や会話はあまりないという回答が70%以上を占め、高齢者との交流が少ない生活環境にあることが窺えた。また、両親の祖父母との

交流状況がFSAに影響するという報告があるが⁵⁾、本研究において差は見られなかった。両親と祖父母の交流があまりないと回答した学生は2人だったことから、両親からの影響の違いはないといえる。以上のことから、学生の背景は、FSA変化や高齢者イメージ変化の交絡因子にはなっていないことが示唆された。

2. ライフインタビューとイメージ変化の関連

高齢者イメージの実習前後の比較では、15項目中10項目が肯定的に変化した。感情は、外的刺激によって引き起こされた心的活動である⁶⁾。高齢者と交流することにより、「明るさ」「積極性」「さっそう」「素直さ」感情が生まれたと思われる。「尊敬の念」「好き」は、単に交流するだけでは変化しにくい感情であり、もともと高い数値を示していたことも変化しにくかったと推察する。

内容との関連では、表5にあるように、有意差のみ

られた内容は、否定的イメージに関連していた。しかし、全体のイメージは肯定的になっていることから、イメージは話の内容より、交流することにより左右されると考えられる。

3. ライフインタビューとFSA変化の関連

実習前より実習後のFSAが有意に低値を示した。下位項目では、第1因子（嫌悪・差別）に分類されている項目10、第2因子（回避）に分類されている項目7、12、13、14が有意に低値を示した。回避は、できるだけ高齢者との交流を避けて距離をおきたいという感情成分を示す概念として位置づけられている³⁾。学生の背景をみると、高齢者との交流が少ない状況が窺える。日常生活においてあまり触れ合いがないことが、回避感情につながっていたと思われる。実習で高齢者にインタビューしたことで触れ合いができ、その体験が回避感情の軽減につながったと考える。石倉⁷⁾や村田⁸⁾らも交流が回避に影響したと報告しており、同様の傾向といえる。ライフインタビューの体験が回避感情に作用することが示唆された。

インタビュー内容とFSAの関連では、9つの内容に有意な差がみられた。苦しかったこと、仕事、故郷、大事にしていることを聞いた学生の方がFSAは低下していたが、病気、嬉しかったこと、子ども時代のことを聞いた学生の方が、第1因子に分類される項目が高くなっていった。仕事や苦しかったことに関する内容は、頑張ってきたことを語ることにつながる。学生は、長い人生をたくましく歩んできた人として高齢者を受け止め、それがFSAに反映したと推察される。嬉しかったことや子ども時代のことは、語り方によって喪失体験の吐露にもなるし、楽しかった人生の披露にもなる。話の詳細を把握していないので言及することが難しいが、学生にとって、喪失体験や単なる過去の回顧としか映らなかったのかもしれない。

4. 今後の高齢者看護学実習Ⅰの方法

本研究から、高齢者イメージとエイジズムの変化においてライフインタビューの有効性が示唆された。高齢者イメージは、高齢者看護に携わる者の姿勢を形成する源であり看護の質に影響をする^{9~12)}。高齢者と交流の少ない学生にとって、寄り添い、話を聴く機会は不可欠である。今後もライフインタビューを取り入れた実習を継続していきたい。また、インタビュー項目より学生の受け止め方の影響が示唆されたことより、与えられ内容でなく、学生が目的に合わせて計画することが望ましい。

研究の限界

今回は、イメージやFSAの変化を分析したが、学

生的前提は同じという立場で分析しているところに限界がある。また、イメージの把握はVAS法を用いたが、気分の変動を受けやすい。

結論

ライフインタビューの効果として、以下のことが示唆された。

1. FSAの総得点が低下した。下位項目では、回避を示す項目が有意に低下した。
2. 高齢者イメージは、15項目中10項目が肯定的イメージに変化し、交流体験がイメージ変化に影響することが示唆された。
3. 実習にライフインタビューを取り入れることは、高齢者イメージやエイジズムの変化をもたらす効果が期待できる。

謝辞

調査研究にご協力いただいた本学学生に深謝します。

文献

- 1) 大谷英子, 松本光子: 老人イメージと形成要因に関する調査研究, 日本看護研究学会雑誌, 2000 Vol18No4. 25-37, 1995
- 2) 大塚邦子, 正野逸子, 日浦瑞枝, 白井百合子: 看護学生の老人に対するイメージに関する研究, 老年看護学 Vol11, 98-104, 1999
- 3) 原田謙, 杉澤英博: 日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成—都市部の若年男性におけるエイジズムの測定, 老年社会科学 26(3) 316, 2004
- 4) 保坂久美子, 袖井孝子: 大学生の老人イメージ, 社会老年学(27), 22-23, 1988
- 5) 古城幸子, 木下香織, 馬本智恵: 老年看護学の授業による学生の高齢者イメージの変化, 新見公立短期大学紀要, 第24巻, 25-33, 2003
- 6) 岡本祐三, 並河正晃, 藤本直規, 森山美知子: 高齢者医療福祉の新しい方法論, 医学書院, 1998
- 7) 石倉花奈子, 古城幸子: 看護学生の高齢者イメージとエイジズムに関する横断的調査. インターナショナルNursing Care Research, 10(3), 119-127, 2011
- 8) 村田日出子, 小野田真弓, 高野真由美: 看護学生のエイジズムに関する要因—老年看護学概論および実習前後のエイジズムの変化— 川崎市立看護短期大学紀要, 12-17, 2006
- 9) 小泉美佐子, 上本純子: 看護学生の老人イメージ, Semantic Differential 法による分析, 筑波医短大研報, No11, 33-39, 1990
- 10) 畑野相子, 北村隆子, 安田千寿: 老年教育プログラムが高齢者イメージ形成過程に影響する

要因, 滋賀県立大学人間看護学研究, 8, 35-45,
2010

- 11) 守屋滝乃, 稲垣宣子, 鈴木偉代他: 老人に対する意識調査, 看護教育(28), 539, 1987
- 12) 渡辺裕子, 倉田トシ子, 森田祐代: 看護学生の高齢者イメージに関する研究, 山梨県立大学看護大学短期大学部紀要 Vol11, No14, 159-166, 2005